

臨床心理学的立場からみた連続連想について

—Jung のコンプレックス理論を中心にして—

山 愛 美

On the Continuous Association : From Jung's Viewpoint

YAMA Megumi

1. はじめに

Marcel Proust の『失われた時を求めて』(A la Recherche du Temps Perdu) の“私”は、《プチット・マドレーヌ》を口にするとたんに遠い昔の事を思い出す。その時の事を次のように述べている。“菓子の細かいかけらのまじった一口のお茶が、口うらにふれた瞬間、私は身震いした、何か異常なものが身内に生じているのに気づいて“これは Rudolf Otto (1919) のいうヌミノース体験 (numinous experience) の一種であると言えよう。

Proust は、過去の想起について、“強いてこれを求めようとするも徒勞であり、理知のあらゆる努力も無益である”と述べている。ヌミノース体験は、外的な何かと、内的な何かとが、あるいは、意識的な何かと、無意識的な何かとが、超越的な力によって布置された (constellate; Jung の表現を用いれば) 時に初めて、生じると考えられる。また、我々もしばしば経験する日常的な例としては、一見意味のない言葉がつい口をついて出るとか、昨夜聞いた音楽のフレーズが知らず知らずのうちにリフレインされるといった事が挙げられる。あるものを見たり聞いたりした時に、客観的には何のつながりもない昔の出来事を突然思い出したり、あるいは、具体的な事柄ではなく、単にその時の感情だけが喚起されて、訳も分からず急に不機嫌になったりすることがある。これらの事象には、すべて、Jung (1934) が述べたコンプレックスが関係していると言えよう。彼は、このコンプレックスこそが、無意識につながる道だと考え、その実験的な解明のために、連想を臨床的に用い、それを言語連想検査 (Word Association Test) と呼んだ。

本論文では、まず始めにコンプレックス理論並びに、言語連想検査について概観し、次に、連続連想を用いた筆者の実験 (山, 1986, 山, 準備中) を紹介し、最後に臨床心理学的立場から見た連想について考察することを目的とする。

2. コンプレックス理論

心理学において、連想は古い歴史を持つ領域の一つであり、Galton 以後実験室的研究がさかんに行なわれた。この中で特に、個人差や性格の問題を分析しようとする方向では、まず、Kraepelin (1892), Aschaffenburg (1902) が挙げられる。彼らは、それぞれ、アルコール、痲

劣が連想反応に及ぼす影響についての研究を行なった。その後、Bleuler, Jung と続く。Jung は、言語連想を臨床的に用いることを初めて試みた人である。彼は、それまでのように反応語の内容ではなく、簡単な連想において生じる“障害”に注目した。つまり、ある刺激語に対しては、特に反応するのに長い時間がかかったり、刺激語を繰り返して言ってしまうたり、答える時に口を滑らしてしまう等といった、以前には、単なる実験における被験者の失敗として見過ごされていた事柄について考察したのであった。そして、これらの現象の背後には、情動的な要因が働いていると考えたのである。こうして彼は、コンプレックスの発見に至ったわけである。最初に、Jung (1934) の理論と、それをふまえた Kast (1980) の考えを基にして、まず、コンプレックスとは一体何かということについて述べる。

このコンプレックスということばは、英語やドイツ語においてはもとより、日本語においてもそのまま用いられており、非常に日常的である。しかし、例えば、「私はスポーツについてはコンプレックスがあります」といったように「苦手意識」とか、「劣等感」という意味で使われており、本来 Jung が用いた意味とは、かなり異なった内容に用いられている。最初彼は、それを、“感情によって色づけられた複合体”(gefühlbetonter Komplex) と呼んだ。そして、それを、“ある心的状態のイメージであり、強く情動的に強調されており、意識の習慣的態度とは相いれないもの”と定義した。さらに、“このイメージは、力強い内的な一貫性、それ独自の全体性を持ち”、また、“高度な自律性を有する”としている。Kast は、“コンプレックスは、外界や無意識からの情報をコントロールする情動的な中心”であり“連想の結合を持つ核によって構成されている”としている。つまり、心的な内容が、ある情動によって一つの核を形成し、それに関係する何等かの刺激が与えられた時に、意識を越えてそれが活性化され、活動するといった現象があり、この心的な内容の集りがコンプレックスであるというふうに見える。

心理学における“真の無意識の発見者”(Jung, 1934) である Freud も日常生活の中からちょっとした言い間違いや、ふと人や物の名前を忘れるといったような現象に注目して、これらを無意識の為せるわざであるとした。ところが、Freud と Jung とが、決定的に考えを異にしたのは、無意識に関する理論であり、この点で後に 2 人は決別することになったのである。無意識について考えるに当たって、Freud が個人的でありかつ性的な欲望と関連の深い抑圧されたものだけを問題にしたのに対して、Jung は個人的なものだけではなく、人間に普遍的な無意識つまり元型の存在をも問題にしたという点である。これは、コンプレックスに関しての理論にも反映されている。

Kast は、“あらゆるコンプレックスの後には元型が存在する”と述べており、さらに、“単一のコンプレックスが布置されるということはない”と述べているように、コンプレックスというのは、一つ一つが完全に孤立して存在しているのではなく、互いにそれに関連する情動によって絡まりあっているとされている。また、それに関連して、河合 (1971) は、“コンプレックスは多層構造をなしている”としている。比較的意識に近い部分に関係する情動や、深いところから湧き出て来るものなどが、ちょうど網目模様のような構造をなしているといったイメージがある。だから、比較的浅いところに存在するコンプレックスも、その網目の糸を手繰り寄せていけば、最後には、根底にある元型に到達するといったふうに見えることができる。

さてまた Freud と Jung の考え方の相違点を話を戻したい。Freud が、夢を“無意識への

王道”と考えたのに対して、Jung は、このコンプレックスこそが、“無意識への道”であり、“夢や症状の建設者”であるとして、非常に重要視した。ただし、それは“王道”ではなく、“藪の中で無くなってしまっていたり”、“無意識を通り過ぎてしまったり”“荒れた途方もなく回りくどい小道である”とコンプレックスと対面することの大変さ、無意識への到達の困難さ、苦しさを強調している。他方 Kast は、“情動があるところには、変化の可能性がある”、故に、“一層の発展をもたらすのはコンプレックスの情動であり、それはまた常にエネルギーでもある”とその肯定的な側面をも指摘している。山中（1986）もまた、童話の例を挙げる中で、コンプレックスのもつ創造力について述べている。Jung もコンプレックスの事を《心的生命の焦点》と呼び、人間が生きていくのに不可欠であるとしている。さらに付け加えると、もともとコンプレックスには“感情によって色づけられた”といった表現が用いられたように、その感情も必ずしも否定的なものばかりではなく、例えば、嬉しいとか楽しいとかいった肯定的な内容を持つ感情も含まれていると考えられる。つまり、ニュートラルではないということを表わしているようである。

既に述べたように、コンプレックスは、意識を《越えて》やって来るものであり、我々の自我の統合を乱すものである。故に、恐怖と抵抗とがその周りには存在している。それは、あたかも平和な街に、予告もなしに突然訪れる侵入者であり、時にはさんざん暴れて壊し回り、知らん顔で去って行くようなものである。また、この恐ろしいコンプレックスがわけのわからない力によって、知らない間に布置されてしまうということは、人間にとっては不安と恐怖以外の何ものでもなくて、できることならば認めたくない事柄であろう。

Jung もコンプレックスの研究は、“心的タブーの領域”の研究であり、“コンプレックスは真の心的不安の焦点である”と述べている。

それでは、一体コンプレックスはどのような形で姿を現わして来るのであろうか。河合（1971）は、自我とあるコンプレックスとの関係を次の4つに大別している。すなわち、1. 自我がコンプレックスの存在をほとんど意識せずその影響も受けていない、2. 自我が何等かの意味でコンプレックスの影響を受けている、3. 自我とコンプレックスが完全に分離しその主体性の交代が行なわれる、4. 自我とコンプレックスとの間に望ましい関係がある、である。1の状態では何も問題はなく、勿論本人の気づかないところにはコンプレックスが存在しているわけだが、その影響は受けていない。つまり、まだそのコンプレックスと対決する時期が来ていない。あるいは、まだ、布置されていない、のである。2の状態には、その程度に大きな幅がある。ノーマルな人にもよくある言い間違い、わけもわからず不愉快になるといった現象もこれに含まれるし、また、ノイローゼの神経症症状もこれにあたる。2の状態が極端になり、自我がコンプレックスに乗っ取られてしまう状態が、3であり、中世に“つきもの”といった表現が用いられた二重人格の状態である。4は、コンプレックスを意識化し、それをうまく解消できている状態である。

以上、コンプレックスについていろいろな点から述べて来た。次に、言語連想について、Jung（1906）の連想に関する研究の集大成『診断的連想研究』（Diagnostische Assoziationsstudien）をもとにして紹介する。

3. 言語連想検査

Jung は連想実験を、“単なる別々の単語の対の再生のための方法だけではなく、検査者と実験者の間の一種の娯楽、会話である”と考えており、“言葉というものは、行動、状況、物の速記的翻訳である”、“刺激語を被験者に与える時、それは、あたかも彼に行為そのものを与え、それをいかに感じますか？とか、こんな時にあなたはどのようにしますか？などと尋ねるようなものである”と述べている。

言語連想検査は、今日数多くある投影法のテストの先駆的存在とされているが、例えばロールシャッハテストの場合も、あいまいな絵の描かれている図版が、検査者から提供され、これに対して被験者が何に見えるかを答えることによって、一種の《会話》が成立していると考えられよう。もちろん、TAT、文章完成法、描画法等のテストについても、与えられる材料や、答え方が異なるだけで、同様の事がいえる。いずれの場合にも、これらの投影法テストとは、臨床における実際の面接場面あるいは、日常生活を圧縮し、そこからできるだけ客観的に被験者を見るために用いられていると言えよう。

Jung が用いた言語連想検査とは次のようなものである。自らの臨床経験から選び出した100個の単語を刺激語とし、被験者に、これらを聞いて思いつく単語を一つだけできるだけ早く答えてもらう。検査者は、ストップウォッチで、検査者が刺激語を読み終わってから被験者が答えるまでの時間を測定して反応時間とし、反応語とともに記録する。100個の反応をやり終わった後で、もう一度前に言った語を繰り返して言ってもらう。この再検査の際には、正しく再生した場合には(+)、忘れていた場合には(-)、1回目と異なる語を答えた場合にはそれを記入する。

既に述べたように Jung は、こういった検査の結果、ある刺激語に対しては、反応時間が長くなるといった現象に特に注目し、これを情動的な要因によるものと考えた。そのほかにも、明らかに奇妙な反応、同じ刺激語を繰り返す、刺激語を外国語で言い換える、刺激語の誤解、口が滑る、反応語を思いつけない、観念の固執(前の刺激語の観念が固執され、例えば“頭”に対して“帽子”と答え、次の“緑”に対して“かぶる”と答えてしまうような場合)などを、無意識に布置されたコンプレックスの特徴として挙げている。そして、刺激語に対して、反応しようとする被験者を妨害する心的過程のプロセスが、意識の制御の及ばないところに存在するということを認めざるをえないと考えている。

Jung は、反応のタイプは、被験者の“情動的な態度”に依存しているとし、それによって、主に、次の4つの個人のタイプを考えたのである。1. 客観的タイプ 反応が障害を受けることがない、2. コンプレックスタイプ コンプレックスの布置によって実験に多くの障害を示す、3. 定義付けタイプ 刺激語の内容の説明あるいは定義で反応する、4. 叙述的タイプ 定義づけタイプに似ているが、定義付けタイプでは刺激語の知的な意味が強調されるのに対して、このタイプでは、その情動的な意味が強調される、以上の4タイプである。このように、連想の反応の仕方から人間のタイプを考えていくことは、興味深いことであるし、また、臨床の実践においても、非常に効果的な事と思われる。

検査者がテストを解釈する際に、常に心に留めておかねばいけないのは、被験者にだけでなく、検査者の方にも、無意識にコンプレックスが布置されているということである。

Jung (1934) もまたこの事を、“どんな研究者も偏見がなく客観的であっても自分自身のコン

プレックスを無視する余裕はない”と指摘している。これは、テストについてだけでなくもちろん面接場面においても、また日常生活においても同様の事がいえる。故に、自分自身をも含めた《全体》を読み取ることが大切であると思われる。

4. 連続連想

ここでは、まず、連続連想という連想の一つの方法を紹介し、次に、実際にこの方法を用いて行なった筆者（山愛美）の2つの研究（1986、準備中）を紹介する。

連想は、方法的に、1. 分離的自由連想 (discrete free association), 2. 継続的自由連想 (continuous free association) 3. 分離的制限連想 (discrete controlled association), 4. 継続的制限連想 (continuous controlled association) の4種に分類される。自由連想とは、刺激語によって想起されたものを何でも答える方法で、これに対して、制限連想とは、反応の仕方に制限を加える方法である。継続的方法とは、求める反応語が複数個であるのに対して、分離的方法とは、刺激語に対して1つの反応語を求めるものである。Freud が精神分析に用いた自由連想法 (free association) は、方法的には、上記の分類の継続的自由連想にあたる。彼は、ヒステリーの患者にこの方法を用いて、その抑圧されている部分を明らかにすることによって治療を行なった。

筆者（1986）の研究は、コンプレックスの持つ特徴を客観的に明確にするために、コンプレックスとは一体個人にとっていかなるものであり、また彼らがそれらに直面した時にどのように対応するのか、ということを明らかにすることを目的としている。その方法としては、できるだけ客観的に数量を用いて分析できるようなものが必要である。また、一般的に、投影法が目的とするのは、被験者のパーソナリティ特徴を豊富に導き出し、客観的に理解することである。そのためには、できるだけ、表面的、形式的な反応で済ますことができないような課題を用いることが重要であろうと思われる。そこで、連想を用いて、その反応のパターンを分析して、さらには、豊富にパーソナリティの特徴を導き出そうとするならば、上記の分類の、自由連想の形式のものが望ましいと考えられる。反応語が1つしか求められない形式では、例えば、どの刺激語に対しても同じ反応語ばかりで答える、とか反対語や外国語による反応をするといったように被験者の意図的、形式的な反応の技術が入り込む余地があると考えられるからである。確かに、上述のFreud の用いた自由連想法では、反応の連鎖の中に、被験者の内面的なものを豊富に読み取ることにはできる。ゆえに、これを、面接の一部として導入する場合には非常に有効であろうと思われるが、実験の方法として用いる場合には、解釈する時に被験者の個人的な背景に関する知識が必要となって来ることが問題である。また、自由連想法では、ある程度は、被験者が意図的に、連想を自分のコンプレックスから遠ざけようとすることも可能である。もちろん、面接においては、患者が防衛や抵抗ができるということは、極めて重要であるのは言うまでもない。

そこで筆者は、方法としては、1つの刺激語に対して、複数の連想を求めるといった形式のものを考案した。この方法を、以下連続連想と呼ぶ。これには、以下のような特徴があると考えられる。

1. 意図的、形式的な反応語は、数に限りがあるので、反応語が1個しか求められない場合に比べて、複数個求められる場合には、そういった反応に頼ることはより難しくなる。

2. たとえ刺激語が外傷的な内容のものであっても、被験者は、決められた個数の反応語が出されるまでは、対面しなくてはいけない。

3. 複数個の反応語を求めるので、被験者が、反応語を出し始めてから、出し終えるまでの時間的な情動的な動きが、反応語の中に反映される。

以下にこの研究の実験方法について紹介し、その結果を簡単に説明する。

男子大学生40名に対して Jung の行なった言語連想検査を施行し、100個の刺激語の中から、それぞれの被験者の、コンプレックスに係わっており情動的に負荷を持つと思われるもの（コンプレックス語）と、コンプレックスには係わっておらず中性的なものと考えられるもの（中性語）とを選び出した。そして、これらをランダムに配列し、刺激語リストを被験者ごとに個別に作製した。被験者には、これらの刺激語から連想する言葉を、出来るだけ速く10個答えることを求めた。

この実験の結果は、以下に示すようなものであった。

1. 10個の反応語が出せずに途中で被験者の方から中止を願い出る“反応拒否”と所定の時間内（180秒）に10個の反応語を出せない“反応欠如”とは、どちらも中性語に対してよりもコンプレックス語に対して多く出現した。

2. 反応語を感情及び評価において正の負荷を持つもの、負の負荷を持つもの、負荷を持たないものの3種類に分類した。その結果、感情及び評価において負荷をもつ反応語は、正、負ともに中性語に対してよりも、コンプレックス語に対して多く出現した。

3. 2で分類した正、負の負荷を持つ反応語が交互に出現するといった現象が、中性語に対してよりも、コンプレックス語に対して多く出現した。

4. 例えば“大きい”に対して“人”、“軽べつする”に対して“人”といった具合に、“人”という反応語は大抵の刺激語に対して有意義な反応語である”（戸川ら、1959）。この反応語は、中性語に対してよりも、コンプレックス語に対して多く出現した。

また、その出現率の推移は、コンプレックス語の場合には、初発の反応に多く、2回目以降には大幅に減少しているのに対して、中性語の場合には、初発には全く出現せずに、むしろ後半になってから僅かに出現しているにすぎなかった。

1. からは、コンプレックスに係わる語に対しては、被験者は、対面するのを避けようとするし、また、こういった刺激語に対しては、連想が妨害されて、反応語が出せないということが考えられている。2. からは、コンプレックスに係わる語は、刺激語として無意識内の心的領域を活性化し、それに関係する情動が揺り動かされ、その結果、感情及び評価において負荷を持つ反応語が多く出現したのであろうと考察されている。また、そういった反応が必ずしも否定的な意味合いを持つものだけではなく、肯定的なものもやはりコンプレックスに係わる語に対して多く出現したことについては、コンプレックス理論のところでも触れた、“コンプレックスに関係する感情は、必ずしも否定的なものばかりではなく、肯定的な内容を持つ感情も含まれている”ということをサポートする結果である。3. からは、刺激語がコンプレックスに係わるもの場合には、被験者の情動が揺り動かされその結果として評価及び感情が時間的に反転すると考えられている。4. からは、コンプレックスに係わる語に対しては、直面するのを避けたいために、被験者に防衛が働き、一種の防衛反応として初発の反応語として、“人”が多く出現したと考察されている。

山：臨床心理学的立場からみた連続連想について

それに対して、中性語の刺激語に対しては、“人”は後半になってから僅かに出現しており、これは反応語の数を稼ぐためのものではないかと考えられている。

連続連想という方法を用いることによって以上のようなコンプレックスの特徴が、客観的に数値をもって明らかにされた。また、この方法は、意図的な反応技術を用いにくい、つまり防衛をしにくいといった特徴の他に、10個の反応語を出す間の、被験者の情動の時間的推移を見ることができるといった特徴を持っている。被験者の反応を全部まとめて見ると、このように、コンプレックスの、反応のパターンに見られる特徴が明らかにされるが、またそれぞれの被験者の反応を個別に検討することも極めて有意義であろう。そこで、ここに例として3人の反応の一部を挙げる。被験者A 刺激語 “女”/美しい—醜い—可愛い—汚い—可憐な—恋愛—つき合い—不可解—面白い—明るい

被験者B 刺激語 “癖”/爪を噛む—良い—悪い—頭を搔く—癖のある—癖者—（以後反応拒否）

被験者C 刺激語 “嬉しい”/glad—拍手—乾杯—ほど遠い—永久に—雨—第一—人生—一閨—幸運
刺激語 “同情”/sympathy—先生—母親—英語—批評—感情—醜悪—小倉さん—心—お金

刺激語 “親切な”/kind—親—おじいちゃん—おばあちゃん—友達—くすき先生—同志社—試験—親—おじさん

刺激語 “あざける”/ridiculous—自意識過剰—友達—ひょうきん者—英単語—獅子舞—歯医者—ハンドボール—英知—歌

これらの刺激語は、いずれも、それぞれの被験者にとってコンプレックスに係わる語として選ばれたものである。まず、被験者Aは、反応語の評価及び感情における負荷が、肯定的なものと否定的なものとの間で反転がおきるという現象の具体的な例である。反応語を1つずつ順を追って見ていくと、“美しい”という肯定的な意味合いを持つ反応語の次に“醜い”という否定的な語が続いている。3番目には“可愛い”といった肯定的なもの、その次に“汚い”といった否定的なもの、5番目にはまた“可憐な”という肯定的な意味合いを持つものが来ている。これは、被験者Aの“女”という刺激語に対してのイメージに、否定的なものと肯定的なものがあり、情動的に刺激されることによって、不安定になったために、これらの2つのイメージが交互に表われて来たのではないかとということが考えられる。“同情”という刺激語に対して、これと同様の現象の見られたある被験者は、内観報告として、“同情については2つのイメージをもっていきます”と述べている。

被験者Bの場合は、まず初発の反応で“爪を噛む”と答えており、これは、教示の“1つの単語で答えてください”に反するものである。この被験者は、この前の刺激語までは、1つの単語による反応語を出していたわけだから、実験の方法は理解できているはずである。それにもかかわらず、こういった反応が出るのは、刺激語によって被験者が混乱させられたためであるということが考えられる。この次に、2番目の反応として、“良い”と言った後、3番目には“悪い”と答えており、ここにもまた、肯定的なものから否定的な意味合いへの反転がみられる。4、5番目には、“頭を搔く”、“癖のある”とまた初発のものと同様に“癖”の1つの例を2語以上の文章で答えている。さらに、5、6番目には、刺激語が反応語の中に含まれている。これは、刺激語をもう1度繰り返す現象に似ており、やはり、被験者が、刺激語に対して余裕を持って対面ができていないことを示しているように思われる。被験者Bは、6個答えたところで“いやー、も

う思いつきません”と反応を拒否している。これ以上、この被験者は、“癖”というイメージを膨らませることに耐えられなくなったのであろう。

被験者Cの4つの刺激語に対しての反応に共通してみられる特徴は、初発の反応がすべて英語であるということである。この中で、“glad”、“sympathy”、“kind”はいずれも、刺激語をそのまま英語で言い換えたものである。これらは、Jung が、コンプレックスの特徴として挙げている“外国語に刺激語を言い換える”に当たるものである。これも、刺激語と直面するのを避けた結果のように考えられる。こういった意図的な反応は、既に述べた“人”という反応と同様に初発の反応語として、被験者C以外の場合にもいくつか出現していた。また、“あざける”という刺激語に対しての“ridiculous”は、日本語で“馬鹿な”とは言わずにわざわざ英語で言ったものである。この被験者にとって1番目の反応語として“馬鹿な”と言うのは、抵抗があり、英語にすることによって、少し距離を取ろうとしたのではないかと考えられる。各刺激語ごとに反応語をみていくと、“嬉しい”に対して、“glad”、“拍手”、“乾杯”と答えた後に、“程遠い”と自分自身と結びつけたと思われる反応をしている。次に、“永久に”と答えたあと、6番目7番目には、“雨”、“弟”と極めて個人的な連想をしている。さらに、9番目、10番目の反応語を見ると、“闇”、“幸運”となっており、ここにも否定的な意味合いから、肯定的なものへの反転が見られる。次に、“同情”に対しての反応を検討していくと、まず、初発に英語に言い換える反応をし、その後“先生”、“母親”、“英語”と個人的な連想が続く。6番目では、“感情”と、刺激語から距離をとった反応をしているが、その次の7番目では、具体的な人名を挙げている。その次の、“親切な”という刺激語に対しての反応でも、“kind”と英語で答えたあと、また、具体的な人名や、固有名詞を挙げている。このように、個人的な反応語は、初発には出現しておらず、この例からも、連続連想という方法の持つ利点が、明らかにされていると言えよう。また、このように固有名詞で答えてしまうといった極めて個人的な反応は、コンプレックスに係わる刺激語に対してだけであった。刺激語が、コンプレックスに係わっている場合、被験者は、情動的に不安定になり、刺激語と距離を取って一般的な反応語を出すことが出来ない場合があると考えられる。2番目の反応語としての“親”は、9番目に再び出現しており、こういった同じ反応語が、同じ刺激語に対して、繰り返して出現するといった現象は、コンプレックスに触れることによって、被験者が、混乱させられたため出現するものと思われる。“あざける”に対しての反応語を見ても、“獅子舞”とか、“歯医者”とかいったものは、個人的な経験からの反応であり、誰にでも了解し得るものではない。これらもまた、連想の初めの方ではなく、6番目、7番目の反応として出現している。

以上、ここでは、3被験者の数個の例を挙げるに留めた。本論文では、紹介しないが、1人の被験者の全反応語をひとまとめにして目を通すと、色々な刺激語に対して、繰り返して同じ反応語を答えてしまっていたり、また、同じ反応語でなくても、反応語の中に繰り返されるテーマが見つかったりする。臨床の実際場面において、このようなテーマを問題にしていくことも有意義ではないかと思われる。筆者は、コンプレックスに係わる語に対しての反応の特徴を客観的に明らかにすることを、目的として分析を行なっているが、連続連想という方法は、臨床の場面に利用することも、可能ではないかということが考えられる。その場合、テストの一種としても、また、Freud の用いた自由連想法のように面接の場面に組み込むことも考えられよう。

山：臨床心理学的立場からみた連続連想について

次に、もう1つ連続連想を用いた筆者の実験、山（準備中）の一部を紹介する。これは、連続連想によって心身症者の性格特徴を明らかにしようとしたものである。山（1986）の結果を考慮に入れて、刺激語としては“山”、“軽べつする”、“子供”、“癖”、“海”、“妙な”、“からだ”、“誇り”、“病気”、“怒り”、“大きい”、“椅子”の12個を選んだ。このうち“軽べつする”、“癖”、“妙な”、“誇り”、“怒り”の5語は25%以上の人にとってコンプレックスに係わる語として選ばれたものであり、反対に、“山”、“海”は、誰にもコンプレックスに係わる語とならなかったものである。“子供”は、3名以上の被験者にとってコンプレックスに係わる語として選ばれ、かつまた別の3名以上の被験者にとってはコンプレックスに関係していない語として選ばれたものである。また、心身症者を対象にしているということから、身体との関わり方についても検討できるように、“からだ”、“病気”の2語を加えた。さらに、反対語が明確な形容詞、“大きい”と、被験者の心的負担を軽減するために、最後の刺激語としては、比較的連想しやすい具体名詞にし、“机”を選んだ。被験者は、消化器系心身症患者の心身症者群37名と、正常者の統制群30名とした。被験者には、各刺激語に対して出来るだけ早く、思いつく単語を5つ、反応語として答えることを求めた。

結果の一部は次のとおりである。1) 全反応語を、単語による反応、2語以上による反応、長い文による反応、反応拒否、反応欠如、の5種類に分類した。2語以上による反応とは、例えば“子供”に対して“小さい手”といったように、2語以上を用いて反応するものであり、これに対して、長い文による反応とは、例えば“子供は小さくて可愛いものです”といったように、刺激語に対して長い1つの文で答えてしまうもので、連続連想において1番目、2番目、の区別のないものをいう。この結果、単語による反応は、心身症者群に比べて、統制群に多く出現したが、2語以上の反応、長い文による反応、反応拒否、反応欠如はすべて統制群に比べて心身症者群に多く出現していた。単語による反応の出現は、心身症者群、統制群共に連続連想の回が進むに従って減少していた。2) 自己中心的反応は、統制群に比べて心身症者群に多く出現した。自己中心的反応とは、Jung (1906) によるもので、“山”に対して“登りたい”のように直接自分に関係させた反応と“軽べつする”に対して“嫌い”のような主観的判断による反応のことをいう。

心身症者の性格特徴として、Marty ら (1963) や Sifneos (1973) 等は、イメージの貧困さ、感情を適切に言語化出来ないこと、意識的レベルの客観的事実をくどくどと述べる傾向などといったものを挙げている。

上述の結果1. では、全部の反応語を、単語によるもの、2語以上によるもの、長い文によるもの、反応拒否、反応欠如、の5種類に分類した。被験者が求められているのは、単語による反応なのだが、心身症者群では、このような反応は、全体の半分にも満たなかった。長い一つの文による反応は、一見自我に深く関わり、さらにそれを言語化しているかのように見える。しかし、具体的にその反応語を検討してみると、例えば、“海”に対して“毎日出ています”、“子供”に対して“私には2人います”、あるいは、“病気”に対して、自分の病気について、何時、何処の病院に行きました云々と述べており、これらは、既に挙げた心身症者の性格特徴の記述の中の“意識的レベルの客観的事実をくどくどと述べる傾向”というのに当てはまるように思える。つまり、2語以上による反応も含めて、文で反応するということは、決して自我関与した結果のも

のではなくて、むしろ現実レベルの自我に捕らわれてしまい、こういった反応をせざるをえなかったためではないかと考えられる。これは、結果2. で挙げた自己中心的反応に関しても言えることである。“心情反応が多いということは、決してその人の情緒生活が豊かであることは意味しない”と戸川(1959)が述べているように自己中心的反応が多いということは、必ずしも感情や、イメージの豊かさを表わすものではないように思われる。例えば、“山”に対して“嵐山へ行きました”、“病氣”に対して“病氣はとにかく治すもんでなく、病氣だと思ったらあかん。仲良くするもんである”といったような反応は、確かに主観的な反応ではあるが、イメージの豊かさは感じさせないし、被験者の深いところから出てきた反応のようには見えない。このような場合には、自我に関与しているというのではなく、むしろ、自我に拘泥しているといった表現が当てはまるように思われる。コンプレックス理論のところ、その構造の多層性について触れたが、自我に拘泥してしまっている場合には、非常に浅いレベルのコンプレックスに捕らわれて、それ以上深めることができないでいるといった状態にいるように思われる。また、イメージが豊かでない場合に、連続連想のように多くの連想を言うことを求められると、非常に現実的、意識的な答えをしてしまうのであろう。こういった反応は、イメージを膨らませることなく言うことができるからであろう。また、結果1. より、連続連想において、1, 2番目は、単語による反応語を出すことができても、後半になると減少するということがわかった。このことから、反応の出し方には一種の難易度のようなものがあるのではないかとということが示唆されたと言えるだろう。つまり、単語で反応するということは、反応拒否はもちろんのこと、2語以上、あるいは、長い1つの文で答えるよりも難しいのではないかと考えられる。

5. む す び

連続連想という方法によって、コンプレックスに係わる語に対するの反応の特徴を客観的に明らかにすることや、また、心身症者の性格特徴の記述が可能であることがわかった。

連続連想を、臨床の実際場面で用いる場合には、反応拒否、反応欠如を、単にイメージの貧困さということで片付けてしまうのではなく、もう一步進めて、考えてみる必要がある。もちろん文による反応についても、その内容について検討することは有意義であろう。また、現実レベルで答えるにしても、なぜわざわざそれが選ばれたか、例えば、“山”に対して“嵐山へ行きました”と答えた場合でも、他にも登った山はあるはずなのに、なぜわざわざ“嵐山”がここで選ばれたかということを考えることから、さらに深いレベルへに行くことは可能であろう。

筆者の、2つの研究の結果から、コンプレックスの持つ特徴が客観的に明らかにされたし、また、連続連想の臨床場面への応用の可能性も示唆された。治療における面接の場とは、クライアントが、“ゆっくり安心して沈むことのできる場”と筆者は考える。クライアントが、何か引っ掛かりをもつところから、つまり、それがコンプレックスに係わっているところなのだが、イメージを深めていくことが大切であろうと考えられる。ただ、その人にとって、そういうことをする時期が来ている否か、つまり、そのように布置されているか否かを的確に《読む》ことが大切であろう。

連想は非常に日常的で、いわゆるテストに対するように構える必要もない。しかし、この一見簡単なイメージの連鎖から、色々なことを読み取ることが可能である。連続連想という方法に関

山：臨床心理学的立場からみた連続連想について

しては、臨床の場面での応用ということとともに、反応語の内容1つ1つを検討し、それを、客観的な形にして表わすことができるようにすることが今後の課題として考えられる。

引用文献

- Aschaffenburg, G. 1902 Experimentelle Studien über Assoziation. *Psychol. Ard.*, 4, 235-373.
Jung, C. G. 1906 *Gesammelte Werke* 2.
Jung, C. G. 1934 Allgemeines zur Komplextheorie. *Gesammelte Werke* 8. 107-120.
Kast, V. 1980 *Das Assoziationsexperiment in der therapeutischen Praxis*. Fellbach: Bonz.
河合隼雄 1971 コンプレックス 岩波新書
Kraepelin, E. 1892 *Über die Beeinflussung einfacher psychischer Vorgänge durch einige Arzneimittel*.
Marty, P. & M'Uzan, M. de. 1963 La pensée opératoire. *Revue française de psychoanalyse*, 27, 345-354.
Otto, R. 1919 *Das Heilige*. C. H. Beck München.
Sifneos, P. E. 1973 The prevalence of 'Alexithymic Characteristics' in psychosomatic patients. *Psychotherapy and Psychosomatics*, 22, 255-262.
戸川行男・倉石精一 1959 連想検査法 白亜書房
山 愛美 1986 連続連想に見られる反応パターンの特徴 心理学研究, 57, 287-292.
山 愛美 連続連想に見られる心身症者の性格特徴について (準備中)
山中康裕 1986 絵本と童話のユング心理学 大阪書籍。

(博士課程後期)